

O-035 D&C の回数と子宮内膜厚 The Number of D&C and Endometrial Thickness

○東口 篤司¹⁾, 逸見 博文¹⁾, 斎藤 学²⁾, 板橋 詠子²⁾

¹⁾KKR 札幌医療センター斗南病院生殖内分泌科, ²⁾KKR 札幌医療センター斗南病院婦人科

【目的】多くの臨床家が D&C は子宮内膜を薄くしていると感じていると思われるが、国内的にも世界的にも文献は極めて少なく、D&C は子宮内膜を薄くしないとする報告もみられる。その議論の解決のため、何回 D&C をすれば、どのくらい子宮内膜が薄くなるか、を後方視的に検討した。このような視点でおこなわれた研究は現在まで世界的にも認められない。【方法】2008 年 1 月から 2010 年 12 月までに当科を受診した症例の自然周期 (n=314) において排卵 1 日前 (n=241) と排卵後 5-7 日目 (n=184) に子宮内膜厚を測定した。受診後最初に測定した内膜厚値を集計した。排卵障害、子宮腔が変形する子宮筋腫、子宮腺筋症、子宮奇形、子宮内膜ポリープ、喫煙者、BMI²30、Pentoxifylline など子宮内膜厚に影響する薬剤服用中の症例、子宮内容除去を吸引でおこなった症例は除外した。【結果】D&C は自然流産 (n=52) 人工中絶 (n=41) 子宮内膜ポリープ (n=13) 子宮外妊娠 (n=6) 子宮内膜過形成 (n=3) Asherman 症候群 (n=2) に計 117 回おこなわれていた。排卵 1 日前では D&C の既往がない症例で 10.5 mm (n=157) D&C の既往 1 回の症例で 9.5 mm (n=51) D&C の既往 2 回の症例で 8.6 mm (n=27) D&C の既往 3 回の症例で 7.8 mm (n=5) D&C の既往 4 回で 3.5 mm (n=1) だった (Spearman's rank correlation coefficient = -0.34, p<0.01)。排卵後 5-7 日目では D&C の既往がない症例で 10.7 mm (n=113) D&C の既往 1 回の症例で 9.3 mm (n=46) D&C の既往 2 回の症例で 8.2 mm (n=18) D&C の既往 3 回の症例で 6.1 mm (n=5) D&C の既往 4 回で 5.6 mm (n=2) だった (Spearman's rank correlation coefficient = -0.39, p<0.01)。つまり排卵直前に測定しても着床期に測定しても D&C を重ねるごとに子宮内膜は薄くなっている所見であった。【結論】D&C は子宮内膜を薄くしている。

O-036 子宮内膜の薄い症例に対するビタミン E 療法の検討 Vitamin E Therapy for Cases with a Thin Endometrium

○北村 誠司¹⁾, 田巻 智慧¹⁾, 松村 康子¹⁾, 桐明 千晶¹⁾, 佐藤 仁美¹⁾, 佐々木幸子¹⁾, 平岡謙一郎¹⁾, 菅野 秀俊²⁾, 森川 香子²⁾, 宇都 博文²⁾, 吉田 宏之²⁾, 杉山 武²⁾

¹⁾荻窪病院虹クリニック, ²⁾荻窪病院産婦人科

【目的】子宮内膜が薄いと着床率、妊娠率が低下することが知られている。今回、その対策としてのビタミン E 療法の治療効果の検討を目的とした。【方法・対象】2009 年 1 月から 2011 年 3 月までに虹クリニックにてビタミン E と C を投与しながら融解胚移植を受けた 34 症例を対象とした。平均年齢 40.0 歳。当院では、子宮内膜の薄い体外受精症例に対して、まずホルモン補充 (HR) 周期による融解胚移植、次にビタミン E+C を投与した融解胚移植を適応している。最近ではビタミン E+C 投与した HR 周期による融解胚移植も行っている。融解胚移植の治療前 1-3 周期からビタミン E (ユベラ 300mg 3×)、ビタミン C (アスコルビン酸 600mg 3×) を内服、妊娠判定まで継続する。子宮内膜厚、着床率、妊娠率を検討した。【結果】ビタミン E 療法時の子宮内膜厚 (排卵前) 7.4±1.0mm, 同一症例の自然排卵周期の子宮内膜厚 (排卵前) 7.0±1.6mm, HR 周期での内膜厚 (排卵前相当) 7.7mm, 内膜の肥厚率 1.1±0.28 (ビタミン E 療法/自然排卵周期)。ビタミン E 療法により子宮内膜は有意に厚くはならなかった。着床率 34.2% (13/38), 妊娠率 33.3% (12/36), HR 周期併用での妊娠 4 症例 (4/6), 胚盤胞移植での妊娠 2 症例 (2/5)。同時期の融解胚移植での着床率 26.1%, 妊娠率 29.2% と比較しても、やや高い傾向が示された。【考察】ビタミン E 療法により、子宮内膜はそれ程厚くならないと考えられた。着床率、妊娠率は通常の融解胚移植と同等の結果が得られ、薄い内膜でも着床・妊娠率の引き上げが期待された。HR 周期併用での妊娠例も複数認められ、妊娠への効果が期待された。【結論】ビタミン E 療法により子宮内膜は厚くはならないが、子宮内膜が薄い状態でも着床率、妊娠率を引き上げる可能性があり、有用と考えられた。

O-037 クロミフェンを用いた融解胚盤胞移植の至適時期について When is the Suitable Timing of Warmed Blastocyst Embryo Transfer which were Obtained from Mild Ovarian Stimulation with Clomiphene Citrate

○黄木 詩麗, 萩原千加子, 川嶋美智子, 中村 忠治, 矢内原 敦
矢内原ウイメンズクリニック

【目的】患者負担を軽減する目的からクロミフェン (CC) を使用した Mild 刺激法が近年増加傾向にある。しかし、CC のエストロゲンレセプターと競合するという特性より子宮内膜が薄くなるという特徴があり良好胚でも移植時の子宮内膜が十分な厚さではない場合、移植に躊躇することがある。新鮮胚移植を避け、ホルモン補充周期で融解胚移植を試みる際にエストロゲン補充の量を増量しても子宮内膜が厚くならないこともある。また、CC を用いた採卵周期直後の周期で融解胚盤胞移植を行っても着床しないことを経験する。そこで我々は、CC を用いた排卵誘発刺激での採卵後に良好胚盤胞の融解胚移植を行った症例で、CC を使用した時期から融解胚移植までの期間により妊娠率を求め、至適な胚移植時期を検討した。【方法】2009 年 4 月から 2011 年 5 月まで CC を用いた採卵周期後、良好胚盤胞を凍結することができ、さらにホルモン補充による融解胚移植をした 178 症例 269 周期を対象とした。CC 使用から融解胚移植周期までの期間を 2 週間ごとに分け、それぞれの妊娠率を検討した。対象は 40 歳未満とし、融解胚移植時の子宮内膜は 8mm 以上、移植に供する胚は 3BB 以上の良好胚とした。また、CC を用いた採卵周期後に他の刺激法を用いた周期がある症例は除外した。【成績】CC 使用後 2, 4, 6, 8, 10, 12, 14 週間後, 16 週以上の 8 群の平均年齢に差を認めなかった。妊娠率はそれぞれ 33.3%, 44.3%, 75%, 72.7%, 50.0%, 61.5%, 44.4%, 41.8% であった。融解移植時期を 6 週未満, 6 週以降と分けた場合、それぞれの妊娠率が 37.3%, 53.0% となり 6 週以降の時期の妊娠率がそれ以前に移植した場合に比較して有意に高い結果となった (p=0.03)。【結論】CC を用いた採卵周期後早期の融解胚移植は避け、少なくとも 6 週間はあけたほうが好ましいと考えられた。